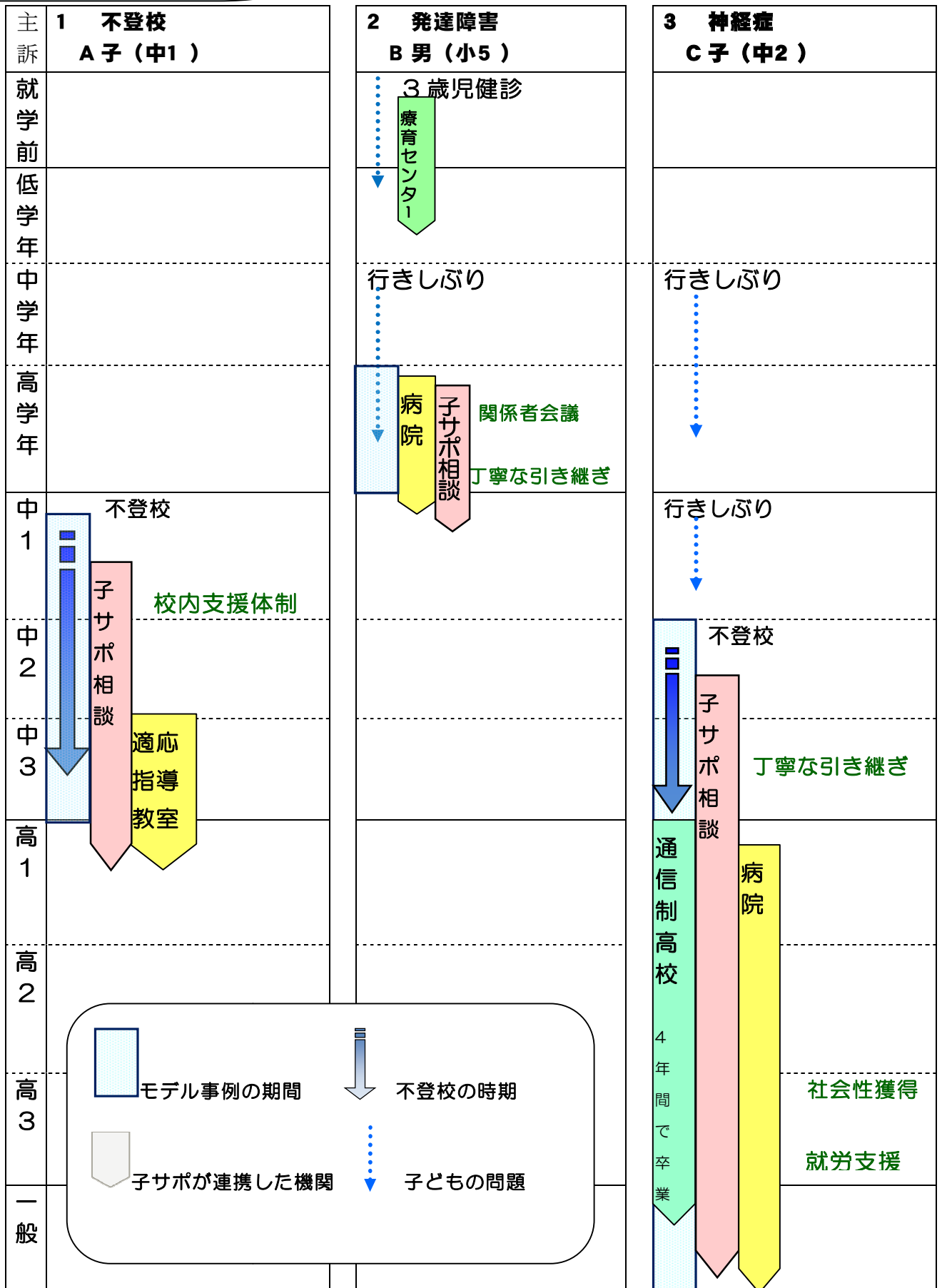


学校との関係性を基盤にした

<各主訴ごとの連携モデルケース 一覧>



## <連携モデルケース 1>

### 主訴：不登校

中学1年生のA子は、2学期半ばの現在、全く登校できない状態です。学校だけでなく、買い物や遊びに行くなどの外出も嫌がり、自宅から出ることができません。

それまで、元気に登校していたA子の様子に変化が見られ始めたのは、2学期がスタートして間もなくのことでした。

朝になると、頭痛や腹痛を訴えて、登校することができません。ところが、体調が悪いのは朝だけで、午後になると元気を取り戻し、ゲームをしたりマンガを読んだり、気ままに過ごしています。そのような様子は、母親にとっては、怠けているようにしか見えませんでした。そこで、強引に登校させようとすると、泣いて物を投げたり、暴れたりします。

それでも、始めのうちは、何とか登校させることができました。しかし、しだいに欠席が増えてきて、暴力・暴言も激しくなってきました。

そして、とうとう全く登校せず、自宅から外に出ることもできなくなってしまったのです。



## 第1段階 学校と保護者の関係維持

保護者は担任に相談  
子サポを紹介  
チーム支援

困り果てた母親は、まず、担任に相談をしました。すると、担任からは「今は、無理に登校させるのはやめましょう。」「A子の情緒が安定したら、次の対応を考えましょう。」という提案がありました。

しかし、学校に全く行かず、自宅に引きこもっている状態が、母親は心配でなりません。「ちょっとでも、学校に行ってみたら。」「勉強が遅れてしまう。」などの言葉をかけてしまい、不機嫌になったA子が母親に暴言や暴力をふるうという悪循環に陥っていました。

母親支援が必要と考えた学校は、SCを紹介しました。しかし、母親の仕事の都合とSCの勤務日が合わないため、子どもと親のサポートセンター（以下子サポ）での相談を勧めました。

さらに、学校は、校内の支援体制を整えました。担任を中心として、生徒指導主任や学年主任、養護教諭を加えた支援チームが作られ、今後の支援の進め方を検討しました。



## 第2段階 連携基盤づくり 学校と子サポの連携

### 子サポでの相談開始 保護者、学校、子サポ の連携

母親は、子サポに来所申し込みをして、親担当との相談を開始しました。親担当は、不安になっている母親を支えることを心がけながら、相談を続けました。母親が、親担当からのアドバイスを受けて、無理に登校させるのを止めると、A子の暴力は収まって行きました。しかし、担任からの電話や家庭訪問等のアプローチは、拒み続けていました。

担任から子サポに、これからの対応について相談がありました。A子と直接かかわれなくても、保護者と学校がつながっていることの重要性を説明しました。そして、手紙を届けることなど、無理なくA子とのかかわりを続けることを提案しました。

ゆっくり、ゆっくり、A子は元気を取り戻していきました。担任の根気強い丁寧なかかわりの成果が見え始めたのは、3学期のことでした。手紙に目を通し、電話でなら話ができるようになり、やがて、担任とも会うことができるようになりました。会えるようになったといっても、短い時間で、話す内容は、A子の好きなゲームやマンガについてです。まだ、学校のことを話題にすることはできませんでした。

学年末が近づいてくると、学校は「このまま2年生になってしまっているのか」「この機会に、登校刺激をしてはどうだろうか」と、焦りを感じ始めました。そこで、学校と子サポで関係者会議を行い、現在のA子の状態について見立てをし、今後の対応策を検討することにしました。その中で、「やっと担任との信頼関係が結べたところなので、今はまだ、無理な登校刺激はしないようにしましょう」「A子の気持ちが学校に向いた時に機会を逃さず、登校刺激をしよう。」の2つのことが確認されました。その機会を逃さないために、保護者とのつながりを大切にしていくことも確認されました。

2年生になったA子は、適切なタイミングでの登校刺激によって、放課後登校や市の適応指導教室へ通うことができるようになり、学校復帰へのステップを歩み始めました。担任との信頼関係が基盤にあったからこそであるのは、言うまでもありません。また、新しいことを提案する時には必ず予告をし、A子の気持ちを確認し、無理強いせずには勧めめるなどの配慮も有効だったと思われます。

### 連携成功のポイント

- その1 早期の学校体制づくり
- その2 子どもの状態に応じた関係づくり
- その3 学校と保護者の関係づくり